

韓国における産業伝道の初期展開

—— 経営者との関係を中心に

齊藤涼子 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

はじめに

(1) 本稿の課題

本稿は、韓国において1957年からプロテスタント教会が始めた労働者布教である「産業伝道」の初期の展開を検討するものである。産業伝道は、1948年に、プロテスタント教会の世界組織である世界教会協議会が「労働者にも手をさしのべる」とした決議を発端として始まった運動であり、韓国においては都市工業地帯の布教運動として展開した。活動の方法としては、牧師などの教役者が工場に入って労働者に直接「キリストの教え」を説き、信徒数を増やすように進められたが、これには、朝鮮戦争からの復興過程で教会が産業化する社会に関心を寄せるようになったこと、クリスチャンの間で「成長過程で生じる社会保障、分配、労使対立の問題に教会が関わるべき」とした議論があったことが背景にある。

韓国における産業伝道の重要な特徴として、「都市産業宣教」の前身だったことがあげられる。都市産業宣教は1970年頃から民主労組建設運動を支援したことで知られるクリスチャンの運動であり、通説的には産業伝道を通じて工場労働者と交流した教役者が、劣悪な職場環境を眼前にして、1960年代末から労働問題に接近したことによって端を発するとされている。しかしながら、これまでの研究では、都市産業宣教の前身として産業伝道を認めつつも、具体相を詳細に論じた例はなく、特に産業伝道の開始期においてこの運動がどのような方針をもち、労働現場にどのように近づいたのかに関して検討が進められているとは言いがたい。本稿では、産業伝道の開始期の展開を追跡し、この課題を論じたい。

(2) 先行研究について

これまでの研究状況では、産業伝道の組織的後継である都市産業宣教に関心が寄せられてきた。1998年にソウル永登浦にある永登浦産業宣教会（以下、永登浦）が40年間の活動をまとめた『永登浦産業宣教会40年史』を発行すると、2000年代からハーゲン・クー（Hagen Koo, 2001）、ホン・ヒョニョン（홍현영, 2004）、チャン・スッキョン（장숙경, 2013）らによって都市産業宣教が1970年代以降の労働者の権利獲得闘争＝労働運動のなかで果たした役割が検討されるようになった。これらの資料・研究によれば、産業伝道という名称で工場に教役者を送り込み、「労働現場を福音化」する活動が開始されたのは1957年である（永登浦1998）。これは1948年にアムステルダムで開かれた世界教会協議会において採択された「機械化された工場で8時間または12時間を休みなく働く労働者にキリスト教の真理を伝える運動が20世紀の教会における新たな課題である」というテーマを受け容れたことによる（永登浦1998）。産業伝道は長老会や監理教など教団ごとに始められ、地域の教会が自身の担当する区域（教区）で労働者および経営者に対する布教活動を展開した（永登浦1998）。韓国においては「労働者にキリスト教の真理を伝える」というテーマは教区の信徒数を増やすことに重点化されたため、経営者にも接近したという特徴があり、地域の教会は経営者を通じて工場に教役者を派遣し、礼拝や聖書学習会などを通じて労働者を信徒に加えようとした（ホン2004、チャン2013）。しかし、労働現場を目の当たりにした教役者らは次第に宗教的なアプローチに限界を感じ、個人の救済よりも集団闘争の必要性を感じたことから、教育を通じて労働運動幹部を育成しようとし、労働者の組合建設支援に活動を集中させるようになった（クー2001）。1960年代末から布教運動は労働者支援運動に変化し、運動

の名称も「産業伝道」から「都市産業宣教」に改称した（ホン2004、チャン2013）。

以上のように、布教運動であった産業伝道は労働者支援運動へ変遷したことがわかっている。しかしながら、これまでの研究では運動方向が変化した後の展開に関心が集まっているため、産業伝道期の活動実態が明らかになっているとは言いがたい。先行研究において、本稿の課題にそくして着目される点は、1960年代末に運動が労働者支援に傾くまでは、産業伝道は労働者支援よりむしろ「親経営者」的な性格をもっていったという点である。

すなわち、産業伝道は「勤勉であれ」というキリスト教的な労働倫理を説いたため、従順で熱心な労働者を創出するとして経営者に好意的に受容され（ホン2004）、一方、教会にとっても経営者の協力は労働者布教のために有利であったため、産業伝道は「濡れ手で粟」の布教事業であった（チャン2013）とするものである。また、クーも「聖職者は当初、産業労働者と雇用主にキリストの教えを説くことに関心があった」と労働問題への無関心を認めている（クー2004）。以上のように、産業伝道の労使融和を促進するような性格が指摘されてきているが、では、労働問題を扱うとしながら、なぜ産業伝道は労使融和的であったのか。本稿は、「親経営者的」とされる指摘をふまえて、産業伝道の活動実態を経営者との関係で再検討するものである。

（3）検討する対象と使用する史料について

本稿では、1957年から1965年までを対象に、長老会の産業伝道について検討する。産業伝道は1957年にイエス教長老会（以下長老会）が開始したのを契機に、1965年までの間に監理教、聖公会、キリスト教長老会、救世軍が教団事業として採用したため（永登浦1998）、導入された初期の展開を検討するためには、長老会の活動の検討は欠くことができないからである。

対象時期については、長老会が取り組み始めた1957年から、産業伝道を通じて労働者の小グループが形成された1965年までを扱う。布教のために工場などの労働現場に入った教役者のもとで、労働者の信徒グループが形成されるのが1964～65年である（永登浦1998）。こうしたグループは礼拝や聖書を読む集まりといった宗教活

動や、遠足などのレクリエーションを通じて親睦を深めたが、やがて日常生活や職場の問題を話し合ううちに階級意識を獲得し、労組の重要性について学ぶ拠点と化した（クー2004年）。筆者は、労働現場で産業伝道を担うグループが現れたことを、産業伝道がある程度まで浸透した結果であると考えているため、それまでの期間を産業伝道の初期段階として検討する。

本稿では、教団の総会に置かれた産業伝道委員会や、産業伝道に従事した教役者らが作成した文章を中心に、キリスト教新聞である『基督公報』、キリスト教雑誌『基督教思想』を史料として使用する。『基督公報』は長老会が発行する機関紙であるが、『基督教思想』は大韓基督教書会が発行する超教派的な雑誌であり、一般的な雑誌と比べて、説教や神学論文、聖書研究などが扱われているのが特徴である。

1. 韓国における産業伝道の開始と推進 ― 労働主日と産業伝道週間について

産業伝道は、1948年の世界教会協議会において「労働者にも教会が手をさしのべる」として始められたものである。この決議を受けて1958年に第1回アジア産業伝道大会が開かれるが、この準備のため、1957年にアジア教会協議会の産業伝道部総務のヘンリー・ジョーンズ（Henry D. Jones、アメリカ連合長老会）が来韓したことが、韓国における産業伝道の契機となった。長老会は産業伝道を教団の事業と位置付け、同年4月に「産業伝道委員会」を総会伝道部に設け、5月に伝道部長ファン・グムチョン（황금천）と大邱の宣教師であったオ・ラボク（어라복 / Robert C. Urquhart）を日本と台湾へ産業伝道視察に派遣した。こうして韓国の産業伝道が開始したが、このときの産業伝道の組織的特徴としては①教団の総会で決められた公式事業であること、②財源はアメリカの教会から支出されることがあげられる。仁川の実務牧師（労働現場で活動する教役者）であった趙承赫によると、産業伝道は教団所属の教役者がおこなう活動であるため、各教団に置かれた伝道委員会が決議し、議事に従って進められる教団の公式事業であった（趙承赫1981）。一方、予算面ではアメリカの教会から年間3000ドル程度を支援され、総

会で独自に策定されることはなかった。永登浦の実務牧師を務めた趙之松によれば「年3000ドルの支援金は当時では巨額であった」（趙之松1994）という。

このようにして出発した韓国の産業伝道では、世界的な教会運動の「労働者にキリストの福音を伝える」趣旨とは異なり、「産業界」に布教することが唱えられた。長老会の産業伝道委員会の幹事を務めた呉喆浩は、産業伝道の方針をまとめた『産業伝道手帳』（産業伝道委員会、1965年）において、「職工、監督、事務員、または重役、どのような人であっても、キリストの福音を受けたなら、個人的な伝道者の職責を免れることはできない」として、「職工は職工として、親切と愛を同僚に見せてやることで、キリストを伝えることができるのであり、[……] 重役も主の謙従として、信仰的な企業経営を通じてこそ同僚重役にも部下の職工にもキリストの生きる手本となることができる」（33頁）と産業伝道の意義を唱えた。

その目標のために計画されたもののひとつに、「労働主日」と「産業伝道週間」がある。これは、キリスト教の労働節である3月10日の後、最初の日曜日を労働主日として礼拝をおこない、その後の1週間を産業伝道週間と定めて、信徒訪問をおこなう行事である。『産業伝道手帳』にはこの行事の重要性を以下のように記している。

特に、この思想〔信徒が産業伝道を推進すること - 引用者〕の普及のために制定された「産業伝道週間」や「労働主日」は、全信徒に、彼が職工であれ、事務員であれ、企業主であれ、その間に彼らの産業伝道のための信仰生活を奨めるだけでなく、教会の労働社会に対する関心を表してあげるものである。

この期間を通じて、信仰的労働と企業経営はもちろん、社会福祉建設のための活動に教会も参与していることを十分に見せてあげることで、労働運動の正当性や志向するべきところを明白に教えてあげることができれば、産業伝道は成果を収めるのである。〔太字は原文ママ〕

（呉喆浩『産業伝道手帳』産業伝道委員会、1965年、52頁）

以上を見ると、労働主日と産業伝道週間は、「産業に携わる全信徒」に「教会が産業に関心を持っていることをアピールする」ために重要であり、この行事を通じて、教会が労働者や経営者を牽引して布教を進めようとしたことがわかる。それでは、この行事はどのようにおこなわれたのだろうか。『産業伝道手帳』には行事の進め方が詳しく解説されている。【図1】に示したのは、労働主日におこなう説教の模範例である。ここからどのようなことが見えてくるだろうか。

説教は、序論・本論・結論で構成され、さらに本論は1から4の節に分かれている。まず、序論では父（神）は天地創造という「仕事」をしたということ、またその子のイエスは「働く者」の手本であるということが示される。次に本論では、1. 働くことは主の命である、2. すべての労働は神々しい、3. 労働者、農民の人格的な権益と生活基盤が確保されねばならない、4. 労働者と農民に最初に伝道することの4部分に分けて説教がおこなわれるように組み立てられており、最後に結論として、「キリスト教は勤労を尊ぶ宗教である」ということが強調されている。

この説教の構成上の特徴として、働く人間は神・イエスにつながっているということをはじめに示し、最後の結論において勤労を奨励するという構成をとっていること、本論の4節で、労働者・経営者・教会それぞれの立場に呼びかけるようにしていることがあげられる。このなかで着目される点は、本論の多くの部分が労働者向けに作られている点である。たとえば、「1.働くことは主の命である」では、「額に汗を流す」、「働かざる者食うべからず」という文言が聖書から引用され、さらに「2.すべての労働は神々しい」では、「肉体労働を卑しむ観念を清算すべき」、「肉体労働の数はより多く必要」と直接的な表現で労働に勤しむことを呼びかけている。結論の部分でも、修道院の事例を取りあげることで肉体労働をクリスチャンの模範的な行動のように説いている。

以上のことから2つの特徴を見ることができ。第1に、労働主日の礼拝においては、労働者に勤労を奨め、経営者に分配問題を説教し、教会にはまず労働者に布教するように説いていたことである。このことは、産業伝道が「産業界に広く」布教しようとした目的と合致するもので

ある。第2に、労働者に対して肉体労働が神聖であること、勤労が尊いものであることを強調していたことである。

それでは、労働主日の後に設定された産業伝道週間にはどのようなことがおこなわれていたのだろうか。【表1】を見てみると、この期間中に訪問すべき相手と目的が曜日ごとに示されており、特徴として、訪問相手にあわせて目的を変えていることがあげられる。

具体的に明示されている例として、月曜日の工場訪問では「聖歌隊や青年会が勤労者〔労働者－引用者〕招待音楽会」を開催すること、木曜日の公務員信徒訪問では座談会を開くことが奨められている。この表中、労働者と経営者に対する訪問目的の差異に注目したい。労働者訪問（火曜日）では、「懇親会や座談会を開き、信仰をどのようにすれば生活化でき、労働生活にどのような方法で表すべきかということをも根本的に研究させる」とあり、一方、経営者訪問（水曜日）では、「企業の重役の職責をもつ信徒を中心として、産業伝道事業の後援について研究討議する集まりをもつ〔傍線は引用者〕」とある。労働主日の模範説教に促せば、労働者信徒に対する「信仰を労働生活に反映させる」という目的は、「勤労の推奨」であったことが推測される。しかし、経営者信徒に対して求めたことは説教で示した「分配問題」ではなく、「事業の後援」であった。それでは、産業伝道の推進にとって、経営者信徒とはどのような存在であったのだろうか。そして、「後援」とはどのようなことを指すのだろうか。

産業伝道において、経営者に対する布教は重要であると考えられていた。呉喆浩は『基督教思想』に「韓国における産業伝道の実態」と題して以下のように記している。

経営者伝道の重要性は大きく2つ挙げることができるが、ひとつには、信仰的で正直かつ誠実な経営の奨励と、もうひとつには、社会のための企業運営の奨励である。

すなわち、まさに主より付託された僕として〔……〕主の創造と摂理の歴史を遂行するのであり、二重帳簿、欺瞞、不良品の製造禁止などを意味するのである。ふたつめには私欲を満たすための企業運営ではなく、ひとり

の社会人として社会の経済発展のため、さらに、雇傭者の人格的待遇や、最低賃金制による生活保障制度を立てることで、社会大衆の共同福利のために企業を経営することを意味する。

（呉喆浩「韓国における産業伝道の実態」『基督教思想』1961年5月、64－65頁）

また、呉喆浩は同論考のなかで、「経営者に伝道することは、ときには労働者に伝道するよりも重要である」（64頁）とも述べている。韓国における産業伝道の特徴のひとつとして経営者も活動対象に含めたことがあげられるが、その理由は以上のような考え方に基づいていた。それでは、経営者に対する「伝道」はどのように進められたのだろうか。

2. 産業伝道と経営者 — 工場礼拝について

上述したように、産業伝道は労働者と経営者双方に呼びかけるものとして始められ、特に経営者への布教は、正直で誠実な経営の奨励は社会福利につながるとして重要だとされていた。しかしながら、経営者への「伝道」は困難なことであった。呉喆浩の記述には以下のような部分があることに注目したい。

韓国の教会の企業家や経営者は、自分が教会員であることから自身の雇傭者に伝道する義務があるという思いがあっても、非キリスト教者の経営者に伝道すべきであるという使命は忘れがちである。そればかりか、教会も、労働者に気軽に手を差しのべることができても、経営者には果敢ある態度で福音を伝えることができない場合が多い。〔傍線は引用者〕

（呉喆浩「韓国における産業伝道の実態」『基督教思想』1961年5月、64頁）

では、経営者へ「果敢ある態度」をとることができないのはなぜだろうか。呉喆浩はその理由として「特に、韓国の教会は大企業家が教会のために貢献している場合が多い」とし、「経営者への伝道を恐れるようになる」（65頁）と記してい

【図1】説教の模範例(『産業伝道手帳』56—58頁から引用)

ソウル永楽教会 ハン・ギョンジク (한경직) 牧師

題目：勤労の宗教（三千里の山河を治めて働け）テサロニケ 2 3:6-16、ヨハネ5:17

序論

- ①父は今に至るまで働いておられる。天体の運行、自然界の生長と発展、人類の歴史、恩恵の歴史をいつも継続しておられ、宇宙を治め守る責任を人類に分け与えられた。
- ②キリストも父といつとともに働いておられる。特に教会を始めとしてすべての恩恵の歴史を行われ、われわれにとって働く者の手本となった。

本論

I. 働くことは主の命である。

- ①エデンの園を治めておられる 創世記2:15
- ②顔に汗を流すように 創世記3:19
- ③働きたくない者は食べてはならない テサロニケ 2 3:10
- ④勤勉にせよ 箴言6:6-11、エペソ4:28

II. すべての労働は神々しい。

- ①キリストは木工の仕事をされた マルコ6:3
- ②キリストは足を洗われる奉仕をされた ヨハネ13:5
- ③使徒パウロは天幕をしたてた 使徒言行録18:3
- ④精神労働だけが貴く、肉体労働を卑しむ従来の観念を根本的に清算するべきである。
- ⑤すべての文化の建設は精神労働と肉体労働の共同貢献である。ただし肉体労働の数はより多く必要である。

III. 労働者、農民の人格的な権益と生活基盤が確保されねばならない。

- ①人格的に正当な待遇をすること コロサイ4:1
- ②生活安定のためにふさわしい賃金を支払いすること マタイ20:1-16、申命記24:15
※正当な賃金を支払わない大罪 レビ記19:13
- ③労働者や農民が窮乏と恐怖から自由になるのは主の意志 ミカ4:4
(人間にあるべき4大自由、宣教の自由、言論の自由、窮乏からの自由、恐怖からの自由)

IV. 労働者と農民に最初に伝道すること

- ①イエスはガリラヤの漁夫に最初に伝道した。
- ②イエスは貧しい中にある者たちに最初に伝道した。

結論

- ①キリスト教は現実的な勤労の宗教である。ナザレの木工がキリスト教信徒の勤労の手本である。
- ②キリスト教は常に勤労をより尊重する観念の現実化と信仰の生活化を求める。中世時代、修道院においても特に肉体労働を尊重したことがよい例である。
- ③教会は運営者にも勤労大衆にも主の代弁者として主の召命「神に選ばれ使命を与えられること—引用者」を鼓吹し、彼らの不正を是正し、また権益を擁護しなければならない。
- ④彼らへの伝道に特別に力を注ぎ、僕の使命を全うできるように進めよ。[傍線は引用者]

【表1】産業伝道週間の進行表(『産業伝道手帳』54-56頁から引用)

区分	日付	聖書の句節・祈祷題目	行事
予備期間	水曜日	使徒行伝録1:8「僕の証人となれ」種のために	予備時。産業伝道事業の発展のため、各地の教会と使徒の召命を十分に自覚するようにして諸職会[教会で各職員の者が集まって議論する会-引用者]や職員会で労働週間と産業伝道週間行事について十分に話し合う。
労働主日	3月第2日曜日	ヨハネ5:17、コロサイ1:24「第2の福音の受肉化身として『僕も働く』」産業伝道事業推進のために	信仰と労働をよく理解するために、できるだけ案内書にしたがって、一定の方法で昼の礼拝をおこない、夕べの礼拝は勤労者献身礼拝をするように準備すること。信徒の労働が主の継続的な歴史の表れであり、福音を証拠する[信仰の証を立てる-引用者]ことで、労働という祭物を通じて人格的な祭物の意味を強調し、献金がこのひとつの具現であることを自覚できるようにする。
産業伝道週間	月曜日	マタイ28:18-20「あらゆる人びとに福音を伝えよ」各地の教会の産業伝道のために	各地の教会は、所属機関を通じて、産業社会に伝道する方案を研究討議すること。近隣にある工場へ伝道する目的で訪問すること。親睦会や見学などを計画、実施し、聖歌隊や青年会が勤労者招待音楽会を開催するのもよい。
	火曜日	マタイ25:14-30「小さな仕事にも忠実にせよ」あらゆる企業の従業員のために	信徒中、産業体に勤務する従業員を中心にした懇親会や座談会を開き、信仰をどのようにすれば生活化でき、労働生活にどのような方法で表すべきかということを根本的に研究させる。信仰生活と社会生活が主の意志のなかでひとつに表されるとき、主の意志が天に実現すると同時に、地上にも実現する。
	水曜日	マタイ20:1-16「主の僕として善き運営をせよ」あらゆる企業の運営者のために	夕べの礼拝では信徒の財産は個人のものではなく、能力に従って主から預けられたものであり、信徒は自身の力を尽くして財を育てるようにすること。主の意志に従って、正直に清く民族と国家のために企業を運営する主の僕となるように強調しなければならない。企業の重役の職責をもつ信徒を中心にして産業伝道事業の後援について研究討議する集まりをもつ。
	木曜日	コリント9:6-15「奉仕の職務から意義ある実を結べ」労働組合指導者の活動のために	官公署で働く信徒を中心とした座談会を開き、彼らの職務が個人の生のためのものより、民族のための奉仕であり、社会のため、公のものであることを自覚できるようにしなければならない。彼らみずからが職務に忠実であることで、キリストを証拠することができる方法を探すように研究させる。
	金曜日	ヨハネ3:1-15「精神的に生まれ変わった官僚となれ」機関の労働行政者の活動のために	夕べに集まる区域礼拝時に、特別にこの国の政事を任された者のなかで、労働行政に携わっている者のために祈祷すること。政事のための行政者が、わが国の民族の発展と社会の繁栄のために奉仕することは、民族と社会の繁栄のためであり、社会の繁栄はすなわち、個人に幸福を約束する主の意志であることを自覚できるように、教役者が信徒を訪問し懇談すること。
	土曜日	マタイ14:14-21「悲惨なわれわれにも早く生きるすべをください」仕事場を得ることができない失業者のために	多くの言葉や祈祷よりも、小さなことであっても気の毒な家庭を探して、労って励ましてやり、主の祝福でもってのみ肉体的にも精神的にも幸福になれるという確証を、悲惨な立場にある人びとに対して見せてやり、自分から自覚することができるように、無言の実践的なおこないを計画して実践する。

る。ここから、当時の教会と経営者の関係がうかがえるが、それは産業伝道においても例外ではない。むしろ産業伝道の推進においては、経営者に積極的に近づくことで布教の入口をつくらうとした側面がある。

たとえば、『産業伝道手帳』の巻末年表には、1960年8月に「第1回移動産業伝道隊を組織し、南韓全域15地域で4000里伝道旅行をした」とある。先行研究によれば、この旅行は主にクリスチャンが社長を務める工場を訪問して、労働者とバレーボールの試合をしたり、食事を提供したり、医科大生が無料診療をおこなったりする

工場訪問キャラバンであった(チャン2013)。また、1962年9月-1963年8月版『産業伝道事業報告書』には1963年8月に「趙之松講師[原文ママ]が、大田地区の産業界と接触し(5企業の重役)、産業伝道事業について討議した」と記されている。このような経営者への接触について、永登浦の実務牧師だった趙之松は以下のように述べている。

はじめて工場で伝道を開始した人々は、労働者を教会へ引き寄せることが目的であった。その後、産業伝道の時期にも大きな違い

はない。ただ企業主と手を取り合って伝道するということに力を尽くしたようだ。社長ひとりに伝道が成功すれば、その工場の労働者はおのずと教会に通うようになると信じていた。そして、キリスト者の経営幹部に会いに行き、工場礼拝をお願いし、それが上手く成功すれば、強制礼拝をおこなうこともあった。(趙之松「産業宣教小話」『産業宣教』21号、永登浦産業宣教会、1994年、70頁)

「工場礼拝」とは、教会の代わりに工場内で教役者がおこなう礼拝を指す。産業伝道では、特にクリスチャンの経営者に近づくことで、工場礼拝の入口を確保しようとしたといえるが、それ以上にクリスチャンの経営者は布教活動に活用できるモデルであった。

産業伝道が始められる前に、すでにおこなわれていたのが「クリスチャンの経営者による雇傭者への布教」であった。その好例として、光州の日新紡織工場に設けられた瑞林教会をあげることができる。瑞林教会は当時「産業伝道の嚆矢」と紹介された。1964年8月22日の『基督公報』によれば、社長の金澄楠は長老職（教会の名誉職）にあり、「社長の救霊熱」によって、1946年2月の第2主日（日曜日）に女子寄宿舎で18名を集めて礼拝したのがこの教会の始まりであるという。その後の展開について『基督公報』には以下のように紹介されている。

この運動は根気よく続けられ、1948年には専任牧師として白理彦牧師を招聘し、重役のひとりとして待遇した。白牧師は、工場内の福音化に積極的に力を尽くすようになった。同年8月に寄宿生の捐補と特別献金による600万ウォンをかけ、55坪の教会堂を現在の位置に建て、社長金澄楠氏とク・ピボクの二人が初代長老となって創立した。

教勢はさらに発展し、創立当時から教会より会社に伝道師を派遣して伝道を始め、多くの職員の移住を進める寸法で、教会へ足を運ぶようにさせた。55年5月には103建坪の教会堂に変貌し、60年9月には現在の朴●允牧師が新しく赴任するようになった。以来、2名の伝道師と6名の長老、50名あまりの男女執事、7●名の若い副教師を擁し、大家族に発展した。[●

は判読不明－引用者]

「産業伝道の嚆矢/光州瑞林教会/工女の口元にはいつも賛美歌が流れて」（『基督公報』1964年8月22日）



【図2】『基督公報』1964年8月22日の紙面。「産業伝道の嚆矢」として日新紡織工場が紹介されている。写真は左が瑞林教会堂、中央が社長の金澄楠、右が朴●允牧師である。

瑞林教会のような布教形態は産業伝道を進める教役者にも着目された。産業伝道開始時に海外視察に派遣されたこともある宣教師のオ・ラボクは1963年3月の『基督教思想』で、大邱にある漢陽絹縫糸工業について「僕が大きく関心を寄せている工場である」と評している。オ・ラボクによれば、長老職にある社長のパク・ヨンジン[박영진]は以下のようにして雇傭者に「伝道」しているという。

この工場に就職する人は必ず信徒でなければならない条件はなく、職工中、信徒と非信徒との数は同じようである。ただし、条件があるとすれば、誰であれ、この工場に入ったなら、福音に対して耳を傾けて聴く意欲を持ち、信徒になろうとする意志を抱かなければならないことである。すなわち、新しく入ってくる職工は必ず賛美歌と聖書を買うことになっていて、購入にあたっては半額を自己負担し、もう半額をパク長老が支払っている。このようにして、ひとつとなった職工が、キリスト教信仰について学ぶことができる基本的な準備ができるようになっているといえる。したがって、このような信仰運動に参加

することを拒む人は働くことができないようになっているのだ。このような方法をよく見てもみると、様々な面で実践してみるに値するよい方法であると考ええる。

(オ・ラボク「産業伝道実況と実話 従業員伝道活動」『基督教思想』1963年3月、55頁)

ここには「聖書と賛美歌の購入」、「教会への参席」が就職条件としてあげられているが、さらに同記事では、礼拝が朝と夕の勤務交替時に各30分、社長のパク・ヨンジンが所属する教会で「すべての従業員」に課されていたことが記されている。これに関してオ・ラボクは「はじめに雇傭を約束するとき教会の出席もともに約束する」(56頁)と述べている。

以上に見られるように、経営者による労働者布教は、オ・ラボクのような産業伝道の推進者に関心を持って取り上げられ、「実践するに値する」と産業伝道に援用できる仕組みのように考えられていた。「産業界を福音化する」産業伝道にとって経営者との関係が重要視されていたのには、このような考えも影響していたといえよう。

おわりに

以上の検討を通じて、本稿で明らかにしたことは以下の3点である。第1に、韓国の産業伝道は開始にあたって労働者・経営者の区別なく教化する方針が採られ、なかでも経営者の教化が重要視されていたこと、第2に、労働者に近づくルートがない産業伝道の初期においては経営者への接近が布教拡大の回路として有効であるとみなされたこと、第3に従来からあった「経営者による雇傭者布教」を産業伝道推進のモデルのひとつと考えていたことである。こうした理由から、性質的に経営者に批判的な活動に至ることは難しく、「親経営者的」な方向へ傾いたと考えることができる。なお、産業伝道が労働者に接近する回路をもっていなかった理由には、教会がもともと中流以上の階層としか接点がなく、ひいてはこのことが労働者への直接布教の障碍となったと考えられるが、これは別の課題であるので、稿を改めて論じたい。

引用・参考文献(本文中に記さなかったもののみ)

チャン・スッキョン [장숙경]『産業宣教、そして1970年代労働運動』(ソニン、2013年)＊韓国語

ホン・ヒョニョン [홍현영]『都市産業宣教会と1970年代労働運動』(『1970年代民衆運動研究』民主化運動記念事業会、2005年)＊韓国語

ハーゲン・クー、高龍秀、滝沢秀樹訳『韓国の労働者－階級形成における文化と政治』(御茶の水書房、2004年)＊原著はHagen Koo (具海根), Korean workers: The Culture and Politics of Class Formation, Cornell University Press, 2001.

『永登浦産業宣教会40年史』(永登浦産業宣教会、1998年)＊韓国語

趙之松「産業宣教小話」『産業宣教』21号(永登浦産業宣教会、1994年)＊韓国語

趙承赫『都市産業宣教の認識』(民衆社、1981年)＊韓国語